

## なんにも仙人

昔々あるところに、弥助さんという人がいました。 弥助さんは働くのが大嫌いでした。

おうちの周りのお百姓さん達が働いている昼間はいつも寝ていました。夕方お百姓さん達が仕事を終えてお家へ帰る頃、そして「かぁ かぁ かぁ」とからすが鳴きながら森の向こうの夕焼け空へ帰って行く頃、弥助さんは「あああ よく寝たなあ」といいながら大きな背伸びをして起きてきました。「なんだか お腹が空いたなあ」と言いながら外へ出て行きました。そして食堂へ行って、お酒を飲んだりご飯やおかずを食べりするのです。

ゆっくりゆっくり食べて、「こけえこっこ、こけえこっこ」と鶏がなきだし、お家の周りのお百姓さんたちが鍬を持って畑へ出かける頃 弥助さんはお家へ帰ってくるのです。「お腹は一杯になったし、寝ようかな」と大あくびをしてお布団にもぐり込みます。

次の日も弥助さんはおうちの周りのお百姓さん達が働いている昼間に寝て、夕方お百姓さん達が仕事を終えてお家へ帰る頃、「かぁ かぁ かぁ」とからすが鳴くと、弥助さんは「あああ よく寝たなあ」といいながら大きな背伸びをして起きてきます。「なんだか お腹が空いたなあ」と言いながら外へ出て行き、そして食堂で、お酒を飲んだりご飯を食べりするのです。「こけえこっこ、こけえこっこ」と鶏がなきだし、お家の周りのお百姓さんたちが鍬を持って畑へ出かける頃 弥助さんはお家へ帰って「お腹は一杯になったし、寝ようかな」と大あくびをしてお布団にもぐり込みます。

次の日も次の日も弥助さんはおうちの周りのお百姓さん達が働いている昼間に寝て、夕方「かぁ かぁ かぁ」とからすが鳴くと、弥助さんは「あああ よく寝たなあ」といいながら大きな背伸びをして起きてきます。「なんだか お腹が空いたなあ」と言いながらご飯を食べに出かけるのです。「こけえこっこ、こけえこっこ」と鶏がなきだすと、 弥助さんはお家へ帰って「お腹は一杯になったし寝ようかな」と大あくびをしてお布団にもぐり込みます。毎日毎日同じようにしていました。

ところがある日のこと、弥助さんがお家へ帰って寝ようと思うと「やすけさん、やすけさん」と誰かが呼ぶような気がしました。周りを見まわしましたが誰もいません。「気のせいかな？誰もいないな」と思い弥助さんは眠ってしまいました。夕方

「かあ かあ かあ」とからすが鳴くと、弥助さんは「あああ よく寝たなあ」といいながら大きな背伸びをして起きてご飯を食べに出かけました。朝がきて「こけえ こっこ、こけえこっこ」と鶏がなきだすと、弥助さんはお家へ帰ってきました。寝ようとする、「やすけさん、やすけさん」と誰かが呼ぶような気がしました。周りを見まわしましたが誰もいません。「又気のせいかな」と、思っていると「やすけさん、やすけさん」とまた呼ぶのです。よ～うく見るとお豆ぐらいの物が呼んでいるみたいなのです。「きみはいったいだあれ」弥助さんは聞いてみました。「私は怠け者が大好きなのです。」と言いました。「ふ～んそうなの」弥助さんは又眠ってしまいました。

その翌日弥助さんはからすが「かあ かあ かあ」と鳴くと、又ご飯を食べに出かけました。朝になって「こけえこっこ、こけえこっこ」と鶏がなきだすと、弥助さんは何時ものようにお家へ帰ってきました。豆粒ぐらいの怠け者大好きさんは百倍ぐらい大きくなっていました。それから毎日毎日大きくなってとうとうお家一杯になる位になってしまいました。朝早く弥助さんが帰ってきても戸が開きません。

しばらく考えて弥助さんは納屋から鍬を持ち出し畑へ行くことにしました。畑で働いてみると結構気持ちが良いので夕方まで働きました。お家へ帰ると戸が開きました。弥助さんは疲れたのでご飯を食べると直ぐ寝てしまいました。次の朝弥助さんは又畑へ行き働きました。次の日も次の日も畑で働きました。弥助さんは畑で働くのが面白くなってきました。

でも怠け者大好きさんは毎日毎日小さくなっていきました。弥助さんに話し掛ける声が段々小さくなっていきました。とうとう怠け者大好きさんは弥助さんのお家から逃げ出してしまいました。

作成；中川眞弥